

## 東日本大震災からの点としてのかかわりについて考える

A Consideration on Personal Involvement in Grief Care after the Great East Japan Earthquake

子どもを亡くした親の会「たんぼぼの会」代表

山下 恵子

Keiko YAMASHITA

子どもを亡くした親と家族を支える会「星の会」代表

武田 康男

Yasuo TAKEDA

## 要旨

本報告は、2011年3月11日おきた東日本大震災からの著者のかかわりをまとめたものである。被災直後から現地へ赴き、個別での関わりを継続して行ってきた。これらの活動は個別的ではあるが、継続することによって、さらなるつながりが生まれる。また、筆者らの住む身近なところで継続しておこなっている活動の中にも組み込むことによって被災地の現状を伝え、ともに考える機会や思いを共有する機会を持つてきたことは、単なる点での関わりではなく、被災地と離れたところともつなぐことができることが示唆された。

【キーワード】 東日本大震災 継続的支援 遺族 支援者

## 1. はじめに

2011年におきた東日本大震災から5年9ヶ月の歳月が流れた。その間に日本各地で起きた豪雨災害や御嶽山の噴火、さらには熊本地震などが起きている。

2016年12月10日現在、東日本大震災での死者15,893人、行方不明者2,556人となっており（警察庁 2016.12 現在）、各地で様々な復興が進む中、2,500人以上の方が未だご家族の元に帰ることができないまま6年余りが過ぎようとしている。またこのような中で救命や探索のために多くの方々が支援に当たった。そしてそれは今も継続されている。

被災者への精神的支援も含めた支援のあり方については多くの研究がされ報告されている。（谷山ほか 2016）。ニュースでも報道されているように、被災県以外から支援に来た人が心を病んでしまうことや支援しているうちに二次的被害を受けていく過程があるにもかかわらず、支援者への精神的支援まではなかなか厳しい現状があったとも報告され、支援者への支援の必要性が報告されている。（宇佐美 2011、大江 2012）

子どもを亡くした親の会「たんぼぼの会」の代表である著者と同じく子どもを亡くしたご家族を支える「星の会」の代表は、震災前からグリーフケアの活動を通して関わりがあった方々への震災直後からの訪問や活動を続けてきた。それは、個人的な点と

しての関りがほとんどであり、そのかかわりを継続することの重要性に気づいた。そこで今回、2012年からの被災地での筆者らのこれまでのかかわりをまとめ、点でのかかわりの意味と今後の課題を明らかにする。

## 2. 訪問および活動の概要と経過

- 2011年3月 看護学科学生への呼びかけ義捐金を集め、市の自助グループが支援している子どもたちへのおもちゃ、お絵かき道具、文房具など送付
- 2011年5月 基金「折り鶴ネットワーク」<sup>注1)</sup> 設立。事務局として参加協力
- 2011年6月\* 思いを託すチャリティーコンサート及び講演会（松本市瑞松寺）  
「被災地とつながり続けるために」国際ジャンティボランティア事務局・瑞松寺住職  
仙台市出身信濃毎日新聞記者講演
- 2011年7月 仙台市訪問。気仙沼市での支援者、仙台市自助グループ責任者、自助グループメンバーと面談  
第5回東アジアグリーフケアセミナー<sup>注2)</sup>（2011年10月 仙台市開催）打ち合わせ
- 2011年8月\* いのちを見つめる林間学校<sup>注3)</sup> プ

	レ講座 「被災地の現実、繋がる居場所は・・・」 (松本市あがたの森) いのちを見つめる林間学校 (長野市中条 音楽堂) 気仙沼市保健師、河北新報記者、南三陸及善蒲鉾専務、週刊まつもと記者招聘	2014年7月	「陽だまりの会」折り鶴ネットワーク事務局との合同お食事交流会 仙台市 東日本大震災復興支援プログラム 「いのちを問う大川小学校で起きたこと報告会」 参加 武田康男講演「ほの暗き灯火を消すことなく」 石巻市大川小学校慰霊清掃・ご家族との面談
2011年10月	第5回東アジアグリーンケアセミナー開催 (仙台医師会館)		
2012年5月	陸前高田市「グリーフの集い」参加・協力 武田康男講演「私はいつもあなたのそばにいます」 気仙沼市 「本吉地区グリーンケアの会」「陽だまりの会」発足に参加および協力	2015年7月	「本吉陽だまりの会」参加、支援者との交流会 大船渡市グリーンケア・サロン準備会 (医療福祉関係支援者の分かち合い会) 参加 石巻市大川小学校慰霊・ご家族との面談
2012年7月	武田康男講演「人生の贈り物」 石巻市大川小学校慰霊、気仙沼市本吉地区「陽だまりの会」、医療者福祉関係者向け講演会および分かち合いの会参加および協力	2015年12月	大川小学校ご家族 (2組) と生きることいのちを考える会、たんぽぼの会との宿泊交流会・お話し会・映画「ちづる」上映会および監督講演会
2012年11月*	第6回東アジアグリーンケアセミナーにて、「大川小学校で起きたこと」と題してNPOここねっと理事佐藤秀明氏講演 (下関市)	2016年3月	フォーラム「東日本大震災から学ぶべきもの」参加。大川小学校慰霊
2013年3月*	東アジアグリーンケア主催「東日本大震災後の家族・支援者とおもいを共有し、いのちを問う ～宮城県石巻市大川小学校で起きたこと～」(北九州市)	2016年7月	「本吉陽だまりの会」参加 気仙沼市本吉地区被災者支援研修会 支援者分かち合いの会 参加 石巻市大川小学校慰霊・ご家族との面談
2013年8月	陸前高田市、気仙沼市、一関市、石巻市訪問。支援者の現状等の聴き取り。 第3回大川小学校第三者検証委員会傍聴		
2013年11月*	第9回いのちを見つめるパネル展注3) (松本市 東昌寺) 大川小学校ご家族、NPOここねっと発達支援センター理事長、犯罪被害者遺族の会「虹」の方のお話、交流会		
2014年3月	気仙沼本吉「陽だまりの会」参加 支援者のグリーンケアの会 話題提供者として参加 武田康男講演「一羽の鳥も落ちることはない」 石巻市大川小学校慰霊・ご家族との面談		

\*は、東北以外および長野県内での活動

### 3. 倫理的配慮

今回の東北での活動をまとめるにあたり、会の参加者、会の主催者や基金事務局担当者には個人が特定されることがないことの承諾を得た。また、看護学科の研究倫理委員会の承諾を得ている。

### 4. かわりの実際

#### 1) 当事者とのかわり

##### ①気仙沼市

2012年5月から開かれている気仙沼市本吉地区「陽だまりの会」は、グリーンを語る場の必要性和被災者の居場所づくりとして始まり、現在も年5回、分かち合いの会や各種イベント等を継続して行っている。(写真 チラシ参照) 分かち合いの会に参加することがほとんどであり、当事者の思いや悩みや苦しみを安心して吐露できる場となっている。また、話をするだけではなく、集まった人たちでできる作



業として、タオル地を利用したお人形づくりや小物づくりをし、できたものは福祉施設等へ寄付することも行ってきた。

分かち合いの会では、筆者のように外部から来たものが加わりお話を聴くことを許されていることに感謝している。2012年の陽だまりの会発足当初から年に1～2回足を運び、会のメンバーとして加えてもらったこと、顔なじみの参加者もいることも外部からの参加者としても安心できる。また、当初から参加してきた人の顔が見えなかつたりするとやはり気になるものである。その方のことを思いながら帰途につくことも多くある。さらに、新たな参加者との出会いやまた次に会えることを楽しみにして会場を後にする。年に2回ほどの訪問と参加であるが、継続して参加することでメンバーとして現地の方々に認めてもらえているのかもしれない。折り鶴ネットワーク基金を活用して、陽だまりの会のみならず、東松島市では女性のためのくつろぎ時間としてお茶会、フラワーアレンジメントやリース作りなどを行い、石巻市においてもサロン、昼食会なども基金設立当初から行われている。

仙台の事務局では現地の主催者や参加者メンバーと年間の予定を決めてもらっている。支障をきたしたことや困ったことなどにも相談に乗りながら、会が暖かく、またより多くの方々に参加してもらえるように連絡を取り合いながら基金の運営について話し合いを持っている。事務局では、当事者からの相談の連絡も入ることもあり、個別に相談に乗って

もらうことも多々あるため、事務局へのフォローも必要となっている。

### ②石巻市大川小学校のご家族

大川小学校では、今回の東日本大震災において全校108名中、74名の児童が死亡あるいは行方不明となり、教員も10名なくなるという痛ましいことが起きた。学校管理下で、このような犠牲を出したのは大川小学校以外になくニュースでも大きく取り上げられ、検証委員会も開かれ、県や教育委員会を相手取って裁判を起こしてご家族は闘っている。筆者らは子どもを亡くした親の会を主宰しており、このことに関しては何らかの形で関わりたいと考えていた。とにかく現場を見ることが、犠牲になった方々の冥福を現地にて祈ることが先決と考えて現地に足を運ぶようになった。東北に訪れた際は、来たときと帰るときの2回現地を訪れて、手を合やすようにしている。大川小学校のご家族の支援にあたっている関係者からその様子を聴く機会が、第6回東アジアグリーンケアセミナーであり、そこからの関わりで欠かさことなく訪問している。また、ご家族との関わりも持たせていただき、長野へと招いてご家族の思いを語る会を「いのちを見つめるパネル展」と共に開催した。一人息子を亡くしたご夫妻は、現地ではみんなが大切な人を亡くしているので、ご自身の想いを語るができないとおっしゃりながら、一人息子を亡くした心の内を語ってくれた。(写真：大川小学校でおきたことをまとめた冊子)

### ③仙台市の母親

自助グループに所属しているお母さんは、子どもたちが大人たちの行動をよく見ていること、大人の様子をうかがっており、自分の気持ちは押し殺して過ごしているように見えると語ってくれた。また子どもたちも以前にきょうだいを亡くした体験を持っており、その心の傷も十分にケアされていない中で震災の出来事に心を痛めていた。

### 2) 支援者とのかわり

東アジアグリーンケアセミナーでの出会いから関わりがある気仙沼市の保健師は、いち早くグリーンケアに現地で取り組み、当事者の会の必要性を感じていた。自身も被災者であり、大切な人を亡くした経験がある。震災直後から、救命とともに心のケア



(喪失に対するケア)に入り、他県からの派遣の心のケアチームと共に地域住民のケアにあってきた。自身も多くのものを喪失しているが、今までの保健活動を通して常に感じてきた生と死、グリーフケアセミナーでの多くの方々からの出会いと学びをもとに、つながりある方々からの気遣うことばや励ましの手紙など、また心のケアチームのスタッフへの気遣いや配慮が精神的支えとなり地域での活動を継続してきていた。

仙台市内で自助グループを主宰しているお母さんは、知り合いの子どもたちを預かりながら、必要物資を届けたり、子どもたちと関わりながら話を聴いたりしていた。東松島市でのお母さんたちのフォローも引き受けて、母親の話を聴く役割も担っていた。また、子どもたちのケアの必要性も感じており、夜中になると子どもたちが恐怖で不安定になること、泣き叫んだりすることが多くあることを語ってくれた。遊びを通して子どもたちは気持ちを出てきており、遊びの重要性を感じていた。しかし、小学校高学年くらいの子供たちは、はじめは話をしていたがだんだん話さなくなり、ゲームに没頭していることがあり心配な状況にも気がつきながら、子どもたちとの関わりを持っていた。

一関市で自身も津波を体験し被災した住職は、県内の病院でのボランティア活動や自身のお寺での集まりやヨガなどを通して、近隣の住民の声に耳を傾けていた。一人の力では不足することを、グリーフに関しての一定の知識を講習会などで行い、一人でも多くの方々と関われる体制をとれるようにしたいと考えていた。また、他の活動団体と協力して分かち合いの会も定期的に開催していた。

こどもの心のケアに関わるある NPO 団体の理事は、子どもたちの心のケアの重要性をひしひしと感じ、「食べる」「遊ぶ」「学ぶ」ことが子どもたちの生活の基本と考え、それが当たり前できるように支援していた。震災以後、味覚を失った子どもたちが多く、まずは「食べる」ことができることを第一に考えていた。「食べる」ことができると「遊ぶ」ことができ、そこから学ぶことへとつながっていくとのことであった。夜間にも不安定になって連絡が入ることも多々ある中で一人一人個別に丁寧に向き合いながら支援活動をしていた。

支援者の会への参加では、支援する方々も多くの方が被災していたり、大切な人を亡くしている中で、支援にあたっている。支援している方々も安心してグリーフを語る場の必要性を感じ準備会を立ち上げて活動が始まった。支援者自身がグリーフ体験を語り、涙を流し、話を聴いてもらえることが重要ではないかと考えていた。

3) 長野県内の身近な人達によるかわり

#### ① 「いのちを見つめるパネル展」の継続

県内では震災を受けて、なにをどのようにしていく必要があるのかわからないまま動くことができないでいる状況であった。2011年6月、震災後3ヶ月に実家が仙台にあり、被災地にいち早く入った県内の新聞記者、国際シャンティボランティア活動を続けている住職から現地の様子を聴く機会をもった。また、話を聴くだけでなく、参加した方々の心も癒したいと考えコンサートも一緒に行った。

2011年7月に東北を訪れ、被災した友人たちに再会したとき、被災地ではまだ混乱状態であったといえる。被災から5か月余経った8月。私たちにできることはないかと考え、今までの行ってきた「いのちを見つめるパネル展」を文字通り、いのちを見

つめるきっかけとして被災した方々(保健師さん、南三陸町かまぼこやさん、河北新報記者)を招いて、パネル展前日にゆっくりと話を聴く機会をもち、主催者自身も離れたところでのどのように感じているのかをお互いに語り合うようにした。そして、次の日はパネル展として、



2014年12月4日付  
市民タイムス

て、場所を設け、お話を聴く会とコンサートを実施した。記者から被災地の状況の写真を提供してもらい展示した。また、仮設でかまぼこの製造を再開したとのことで、再開までの経過や思いを語ってもらい、かまぼこの販売も行った。

さらに、2013年11月には、第9回「いのちを見つめるパネル展」としてNPOここねっと理事とともに、石巻市大川小学校のご夫妻を招いて、お話を伺うこととした。一人息子を亡くしたご夫妻は、現

地ではみんなが大切な人を亡くしているので、ご自身の想いを語るができないとおっしゃりながら、一人息子を亡くした心の内を語ってくれた。また、息子さんの写真や遺品も持参してもらい、パネル展の展示の中に入れていただいた。会からは、息子を交通事故で突然亡くす体験をしたお母さんが息子への想いを語った。その時の雰囲気と様子はその場に参加し感じた人でないとわかりにくく、伝えることが難しいことである。

## 5. 考察

今までの活動は、個人的なつながりを継続して行ってきた。震災から6年経過するにあたり、これまで築いてきた被災地とのつながりと関係性は、重要な意味を持つと思われる。土地は区画整理され、嵩上げなど今後の生活に支障がきたさないように整地されてきている。変わりゆく生活の場の変化と共に気持ちもしっかりと支えられているのかは疑問である。まだまだ、あの時のままで時を過ごしている人たちはいないのだろうか。気持ちも支えられて未来へ歩みを進めているのだろうか。

今回、この六年余りの活動をまとめてみて、点でのつながりだったからこそ、継続でき、個々の力を信じながら、関わってこれたのではないかと思う。年に2回必ず訪問し実際に会って、話を聴き、また周辺の変化も目で見ることによってしか感じられないものがあつたと感じている。点として関わりを持った方々が、おひとりお一人の足で立ち歩んでいけるようにこれからも関わりを持ち続けていきたい。さらに、被災した方々が感覚麻痺や回避ではなく、柔らかな心で震災でのトラウマを受け止めながらも、希望をもって回復する力があることを信じて関わっていかうと考えている。

六年余りの活動が続けてくることができたことは、支援する側にもある程度の覚悟が必要になってくる。関係を絶やすことなくつながり続ける強い思いと関わった人たちの力を信じて関わりを継続していくことが重要である。

これらの関わりは個人の点としての関わりでゆえに一人一人との結びつきができ、継続してつながることで小さな変化にも気がつくことができるのではないかと思う。このような点での関わりがたくさんできることによって、やがては線としてつながってくるのかもしれない。そのためには点の関わりを大事にして、強固にし、やがてつながるであろうことを信じて活動を続けていきたい。

継続して行っている「いのちをみつめるパネル展」の活動の中に、今回起こった震災での体験を含めたいのちへの向き合い方を共有できたことは、被災地

に出向いたことがない人たちにもその様子やそこに生活する人の思いを届けることができたと考える。

### 注1 基金「折り鶴ネットワーク」

2011年5月 子どもを亡くした親と家族を支える会「星の会」代表武田康男基金の代表として設立。大切な人を失った方々への支援は、同じ東北で生き、被災し、今後も当地で歩む人々が中心に担っていくことを鑑みて、広範な被災地の間で連携し、子どもを亡くした親、きょうだいを亡くした子どもたちに向き合うグリーフケアネットワークを構築して、被災地で支援を担う方々に対する資金的な支援をするために立ち上げた。2016年までに440万円余りの資金を仙台事務局に送金し、気仙沼市、東松嶋市、石巻市での被災者の支援に役立てています。資金の活動報告は「こんにちは」で報告し、支援者に送付している。東北では、仙台ファミリーサポートセンターにお願いし基金の管理、運営、調整をしてもらっている。

### 注2 東アジアグリーフケアセミナー (2016年から東アジアグリーフの集いに改名)

2007年より、「グリーフケア」は東アジアの医療、福祉、生活すべての面の問題に重要なメッセージを伝えるものとしてとらえ、年一回各地を会場として定期的に開催してきた。第1回東アジアグリーフケアセミナーを韓国釜山市から始め、北九州市、松本市、仙台市、下関市、宮崎市、新潟市、横浜市でその時々々のグリーフに関わる課題などをテーマとして講演会、ワークショップを開催してきた。また、毎回「いのちのメッセージ」として、子どもを亡くしたご家族からのいのちのメッセージを伝え、さらにそのメッセージを冊子にして配布している。

2016年は下関市にて開催し、2017年は気仙沼市にて開催予定。

本論文の共著の武田康男は代表として、著者は実行委員としてかかわっている。

### 注3 いのちを見つめるパネル展、いのちを見つめる林間学校

2004年から活動開始。生きることいのちを考える会、犯罪被害者遺族の会「虹」、子どもを亡くした親の会「たんぼぼの会」の3団体が年に1回、公民館やあがたの森、市内のお寺などの松本市内の会場を使用して、亡くなった子どもの写真や遺品の展示を行い、いのちについて考える機会をコンサートや講演会、映画上映会、お話し会などを実施。(参照『いのち』を基盤にした市民団体の社会活動が伝えられ

たもの』松本短期大学紀要第22号 pp103 - 106  
2013) 2011年の東日本大震災以降は、被災者の方々  
を招いての会なども行い、現在も継続中である。

#### 参考文献

- 1) 東日本大震災・避難情報&支援情報 (2016)  
<http://hinansyameibo.seesaa.net/category/1331937-1.html>
- 2) 谷山洋三 (2016) 継続する絆をつなぐ宗教的  
資源：東日本大震災の被災者支援の現場から  
(生と死に寄り添う) 死生学年報 pp27-42
- 3) 日本死の臨床研究会 (2015) 2011年3月11日、  
あの時、あれから、今 - 生と死を想う - 死の  
臨床 37 震災支援特別号
- 4) 宇佐美しおり (2011) 被災者にも支援者にも  
必要とされる精神的支援 Nursing Today  
26(4) pp30-32
- 5) 大江浩 (2012) 災害と惨事ストレス、支援者  
のケアの必要性：現場からの声として ボラン  
ティア学 12 pp27-40
- 6) 高橋葉子 (2012) 東日本大震災の支援者支援  
精神医療 (67) pp114-120
- 7) 村本邦子 (2011) レジリエンスモデルによる  
支援者支援 現代のエスプリ (524) pp107-  
116